学徒のシンガポール・ジャカルタ転戦記

尾崎　次敬（青山台在住）

大正12年4月2日、私は長野県上田市の農家に生まれました。男5人、女1人の兄弟です。私の家は比較的大きな農家ではあったのですが、経済的な理由もあり、14歳から高田馬場の医師のもとで書生として働きながら、東京の中学に通いました。

昭和18年3月、中学を卒業。4月に高等商業に入学しました。私は満20歳に達していたため、1年生の途中に徴兵検査を受け、甲種合格となりました。しかし、高等商業1年生であったため、繰上げ卒業とはならず、復学を前提に学業を中断した上で軍へ入隊しました。

昭和18年10月21日、神宮外苑での第1回の学徒出陣に参加。東条英機の甲高い声と岡部文部大臣の「空行かむ海行かむ陸行かむ若人の門出雄々しくもあるか」という言葉が強く印象に残っています。入団前、父は五人の息子の中からようやく軍隊に入る者が出ることを喜んでいましたが、母は一切何も語らず、出征の日も玄関に現れませんでした。戦争に対する恐怖などは全くありませんでしたが、戦死したら母に対してかわいそうなことをしてしまうと感じていました。

昭和18年12月10日、海軍を希望していたこともあり、舞鶴海兵団に入団し、訓練が始まりました。訓練は通常6ヶ月を3ヶ月に短縮したもので、それは厳しく、階段はすべて駆け足で登ったことを思い出します。

昭和19年4月27日、海兵団の訓練を終え、横須賀海軍通信学校に入校。専門的な訓練が始まりました。私は視力が悪かったため暗号の勉強をすることになりました。4年制大学からの徴兵ではなかったため、予備生徒と呼ばれ、下士官候補として暗号術を覚えていきました。途中、横須賀が危険にさらされたため、愛知県の豊川に学校ごと疎開しました。

昭和19年9月15日、同校暗号術普通科を卒業。舞鶴通信隊に配属されることが決まり、その前に名古屋で最後と思い母と会い、一緒に写真を撮りました。

昭和19年10月15日、ジャカルタで艤装中の第109号哨戒艇乗組員を命ぜられました。

昭和19年10月24日、下関でタンカー『天永丸』に便乗し、シンガポールへ向かいました。11月8日、巡洋艦『香椎（かしい）』ほか、駆潜艇の護衛に守られて、当時「昭南」とよばれたシンガポールに到着。はじめて見る現地の水洗トイレに驚かされました。

昭和19年11月26日、『すみれ丸』という商船に乗ってシンガポールを出発し、12月初旬にジャカルタに到着。私が乗船する『109号哨戒艇』は第10方面艦隊所属（長官は福留繁）、乗組員100名足らずの小さな船でした。乗組員同士の結束は強かったように思

います。ほとんどが徴兵された者で、暗号担当は私を含め3名でした。暗号長は、二等兵曹の私が勤めました。部下もいましたが、誰も教えてくれる人がいない中、責任の重大さをつくづく感じました。暗号員の特権は、艇長や通信長よりも早く命令を知ることができることです。また、夜は潜水艦に攻撃される危険がありましたが、南十字星がとても綺麗だったことを覚えています。任務はジャカルタからバンカ海峡、シンガポール手前まで船団を護衛することです。4、5隻の輸送船を、駆逐艦等3、4隻で護衛しました。一つの任務は、3週間ほどで終了します。これを5回6回と繰り返すうちに、昭和20年8月を迎えました。

昭和20年8月6日夕方、バンカ海峡で船団が潜水艦の攻撃を受け、1隻に命中、轟沈しました。私の船も右側から魚雷に狙われました。艇長は、回避するためには「面舵一杯（右へ30度）」と命令しなければならないのに、誤って「取り舵一杯（左へ30度）」と命令してしまい、その直後にあわてて「面舵一杯」と訂正した艇長の言葉が今でも耳に残っています。

その後、私たちはジャカルタに帰港しました。久しぶりにゆっくりしたいと思っていましたが、なぜか日本人の行く店はすべて閉まっていました。また、その時「戦争が終わった」とか「わが10方面艦隊は戦争を続ける」とかいう噂が飛び交いました。終戦の知らせは航海中、私の船には届いていませんでした。そのあとで、艦隊長官から「弾薬を満載せよ」との命令があり、やがて「すべて破棄せよ」という命令に変わり、「ああ負けたんだな」と情けなくなりました。

ジャカルタを英軍に明け渡す少数の人員を残し、私たちはバンドンへ向かい、次の命令を待ちました。体の丈夫だった私は荷役要員に選ばれ、ジャカルタの港湾倉庫で荷物の積み下ろしをする生活が始まりました。格好は、半ズボンに前掛けをし、上半身は裸というものでした。100 kgの砂糖を担がされたり、缶詰や小麦粉を運んだりすることが多かったです。寝床は港の倉庫の2階で、何もないコンクリートの床でした。トイレは砂浜を掘り、板をのせた丸見えの青天井で、夜は星が綺麗でした。どんな作業をするにしても35度くらいの暑さですから、終戦捕虜の悲哀を嫌というほど感じました。1年近く重労働の連続でした。

日本に帰るのに10年もかかるといわれていましたが、昭和21年に入り、体の悪い人から帰国することになりました。私の隊でも、400人から40人くらいにまで減った7月のある日、「明日日本に帰れる」という連絡を受けました。その夜は、感無量で一晩寝ずに荷物をまとめました。7月中にリバティ型帰国船に乗り、航海はスムーズに運び、日本の山々が見えるところまで来たとき、「死ぬつもりで行ったのに、何で帰ってきてしまったのだろ

う」と自問自答したことを覚えています。和歌山県田辺に帰港して、そのまま上田へ帰りました。勝手口から入るとちょうど母親がいて、母は「何だお前か」といって放心していました。戦争中、母は「あの子は絶対生きている、死んだら私がわかる」と常々言っていたそうです。本当に親の愛の偉大さを感じました。

昭和22年4月、高等商業から改名した経済専門学校に復学し、昭和24年3月、ようやく卒業することができました。学業を半ばにして国のために死んでいったたくさんの若人たちの冥福を願ってやみません。

文責　齊藤　暁史、左口　孝史

聞き取りボランティアの感想

ボランティア　齊藤　暁史

学徒出陣に参加された尾崎さんの話を聞くことができた。学徒出陣といえば、神宮外苑の行進の様子と、「きけわだつみのこえ」などで知られる過酷な前線勤務のイメージが強く、それ以外のことはあまり知られていない。しかし、今回の聞き取り作業を通して、そればかりではない、前線に向かうまでの教育期間や、戦後の強制労働といった部分を知ることができた。尾崎さんのケースでは、前線で任務に当たった期間よりもそれまでの教育期間のほうが長く、さらにそれよりも強制労働に従事した期間のほうが長いこともあるのだろう。急に召集されていきなり戦地へ送られたようなイメージでは伝わることのない、一人の学生がどのような経緯をたどって戦中・戦後を生き抜いたかという事実を聞くことにより、その時代のことを一つの現実としてとらえることができるようになる。今回、当時の世相や軍組織などについて予め知識を持って望むことが、聞き取り作業を円滑にし、聞き取る内容を豊富にすることを実感した。

聞き取りボランティアの感想

ボランティア　左口　孝史

もともとボランティア経験は少なかったが，今回のような聞き取りボランティアは初めての経験だった。率直な感想から言うと，とても難しいものだった。体験談の中には軍の話など専門的な語句が多く出てきて，言葉の響きだけではそれが何を意味しているものかすら分からないことが何度もあった。ただ，1つ非常に助かったのは一緒にボランティア

を行ったパートナーが歴史や戦争についての知識が豊富だったことである。自分1人では，戦時中の想いや感想を中心にしかまとめることができず，実際に体験した内容を忠実に文章化することは難しかったと思う。2人で協力してやっていきながらも，メインとなる役割を分担したことで聞き取りを非常にスムーズに行うことができた。戦時体験を聞くということだけでも貴重なことであるのに，地域の年配の方と触れ合えたことや仲間と充実した共同作業ができたことは自分自身の成長にもつながった。そして，今回文章化した戦時体験談を1人でも多くの方に読んでもらい，戦争の恐ろしさ，悲惨さを感じ，平和への願いをより強めてもらいたい。

戦時中を省みて

香取　美雄（布佐在住）

昭和10年、18歳で志願兵として海軍に入隊した。

子どもの頃から「武勇伝」を読んでいて、海外への憧れが強く、海外へ行きたいと思っていた。

17歳のときに、ブラジルで農業をやりたいと思い、ブラジル移民の世話役の鮎川義介のもとを訪ねるが、身内が誰もブラジルへ行っていないという理由で断られた。このことがきっかけで海軍への志願を決意した。

海軍入隊の試験の倍率は、厳しかったがパスすることができた。

昭和10年、横須賀の海兵団に入り、半年間軍隊の教育を受けた。ここでの教育はとても厳しいものだった。海軍四等水兵の位が与えられた。軍律は、とても厳しく、整列時間に1分でも遅れたら「離職の罪」となり進級できなかった。

ここでの教育に耐えかねて、屋上から飛び降り命を落とす者もいた。自ら志願したものの、とんでもないところへ志願してしまったと思うこともあった。

昭和12年から15年の4年間は、上海へ渡り「水雷艇」で揚子江の中に入っていた。機雷を肉眼で見つけ処分するのが任務だった。4年間いたが、亡くなった方もいた。まさに命がけだったが、怖くはなかった。

ここでの功績が認められ、金鵄勲章を受章した。受章時の階級は、海軍一等水兵だった。

金鵄勲章は、何百人に1人もらえるかもらえないかの価値ある勲章である。戦死してからもらえる人の方が多く、生きているうちにもらえるのはとても運の良い人だった。

この受章は、最高の喜びだった。死の危険とはいつも隣り合わせだったが、死に対する

恐怖心はなかった。目の前で亡くなっていく同僚もいたが、私は運が良かったため危険からのがれることができ、また受章できたのだと思う。

下士官になるために水雷学校の試験を何度も受けていたが、数学が100点なのに毎回落ちていた。理由は考課表に「上官抵抗の気味あり」と記されていたためだった。水雷艇が横須賀から舞鶴所属となって「軍艦比叡」に転勤した際、班長が考課表を訂正してくれたおかげで、横須賀の水雷学校の機雷科に入ることができた。

水雷学校を卒業すると、すぐに下士官になり南方へ配属された。昭和17（1942）年のことだった。まずサイパンへ赴任し、その後ポナペ島へ赴任した。ポナペ島では、敵の潜水艦から味方の舟艇を守るために、内地で徴発した商船を改造した特殊舟艇「国光丸」で、機雷をつけた網を張り巡らせる任務を行った。敵の潜水艦が網に引っかかると、網が引っ張られ機雷が爆発する仕組みだった。

南方で下士官をしていたとき、飛行船搭乗予定者として横須賀に戻るように命が下った。飛行船を使って、上空から敵の潜水艦や船、飛行機を監視、発見しようというものであった。しかし、終戦間近で船も飛行機も飛行船もなかったため、気球を上げてそれを船で引っ張っていた。平塚の別荘で気球隊の準備をしていたとき、目の前に焼夷弾が落ちてくる恐怖も味わっている。気球を上げるためには気象学を学ぶ必要があり、気象学を学び、実際に気球を上げるときなどに使った。終戦が迫ってくると、気球や飛行機が無くなってしまい、最後には少しでも敵の飛行機から落とされる爆弾の命中率を下げるために、模型の飛行機を作って凧のように上空に飛ばしていた。こうして、内地で終戦を迎えることになった。南方の人たちを迎えに行った人たちからは、仲間の墓標を抜いて持ち帰ろうとするものの、体力がなくて墓標を抜くことが出来なかった兵隊、薬不足から注射で殺された兵隊もいた。体力がない人たちは、皆病気になり、日本を目前に力尽きた人たちも多かった。

軍隊の教育は、現在でも私のなかで生きている。軍隊で仕込まれたものは、無意識のうちに生活の中で出てくる。しかし、戦場でさんざん人殺しを味わったため、今はゴキブリでさえ殺せない。戦争は勝っても負けても悲惨である。戦争体験者として今の人たちに「戦争は絶対にやってはならないが、強い軍備は必要である。」と伝えたい。

文責　添田　敦子、石堂　敬介

戦争での体験を初めてお聞きして

ボランティア　添田　敦子

戦後60年という節目の年に、何か自分にできることはないかと考え、この聞き取りボ

ランティアに応募しました。

戦争を体験された方に、直接お会いして個人的にお話を伺うのは、私にとって初めての経験でした。

私がお会いした香取さんは、現在89歳でもうすぐ90歳とは思えないほど、とても若々しく驚きました。

軍隊での教育の厳しさ、戦地での体験のすさまじさを香取さんは昨日のことのように覚えており、話をしてくださいました。

「戦争は、絶対にやってはならない」という香取さんの言葉は、体験者としての実感がこめられており、心に響きました。

また、多くの仲間が命を落としたことを話されていましたが、この方々の犠牲の上に、今の私たちの平和な生活があるのだということを改めて思いました。

私たちは、この平和を守っていかなければならないし、この戦争の体験は、これから生まれてくる子どもたちにも語り継いでいかなければならないと思いました。

このボランティアを通じて貴重なお話を伺えたことに感謝いたします。ありがとうございました。

想像することの大切さ

ボランティア　石堂　敬介

アジア太平洋戦争が終わって60年、戦後は還暦を迎えた。幸い私たち日本人は、1945年以降戦争を直接経験することなく過ごしてくることができた。しかし、世界では戦争や紛争は無くなっていない。現在もイラクで戦争が行われている。私たち若者は勿論、多くの日本人は戦争の実感がないと思う。このことはよく考えると非常に恐ろしいことだ。戦争とは実際にはどのようなものなのか、そのことを知らずして戦争について考えることはとてもできないと思う。何故そのような事態になってしまったのか。ひとつには私たち日本人がアジア太平洋戦争と向き合おうとしなかったからではないだろうか。様々な事情はあろうが、戦争を体験した人たちも語ろうとはしなかった。戦争を知らない人たちも聞こうとはしなかった。結果として戦争体験そのものに蓋をしたまま、経済復興に沸き今日まで来てしまったのではないだろうか。

今回の聞き書きボランティアを通して、私は直接戦争体験を聞くという貴重な機会を得ることができた。その体験談はきわめて個人的なものである。歴史の教科書やドキュメン

タリーで見るようなものではない。その方がどのようなことを体験してきたのかというきわめて個人的な内容を聞くことができた。その方の戦争体験というものは、そのままその方の人生の一部分なのである。歴史を大きく見ることからは見えてこない、戦争の元で暮らしていたひとりひとりの人間の姿が、聞き取りで実感できるのだ。聞き取りをしてそれを原稿に落としてゆくという作業は、その方の戦時下での人生を想像し、共感し、理解してゆく作業であった。戦時下という状況の中での様々な体験は、現在では理解することが容易ではないし、素直には受け付けないことも存在する。だからこそ、聞き取りをする中で、その方の体験を想像し、共感し、理解することが非常に重要な作業になってくる。その作業も非常に貴重な体験となった。

私が聞き取りをした体験は、非常に新鮮で驚くことも多かった。戦争体験には興味を持っていたが、まだまだ知らないことが多いようだ。特に記憶の正確さ、鮮明さは印象深かった。それだけ強い出来事だったということもあるだろうし、それだけ戦争体験を現在まで引きずっているということでもあるのではないだろうか。軍隊での生活は現在にまでずっと影響を与えているとおっしゃっていたが、いかに戦争というものがひとりの人間の人生に大きな影響を与えるのかが伝わってきた気がする。教育によって人間がどのように作り変えられてしまうのかも実感を伴い伝わってきた。同じことであっても、本で読むのとは比較にならないほどその方の体験談がリアルに迫ってくるのである。ひとつ意外だったのは、強い軍隊を持つべきだと主張されていたことだった。

戦後 60 年、これを節目として戦争が忘れ去られることがないだろうか、私は心配である。確かに戦後は還暦を迎えたが、戦争はまだ終わっていないと思う。戦争を直接体験した方の中では、まだまだ生々しく生きている体験であるし、歴史認識、靖国問題、補償問題など私たちがアジア太平洋戦争と向き合わねばならないことはまだまだたくさん存在する。歴史というものは現在の生活に生かしてゆくものであると思う。過去は現在と断絶して存在しているのではなく、現在と一連の流れなのだ。戦争を直接体験した方の話を聞く作業は、この断絶を少しでも一連の流れへと変えてゆく作業でもあると思う。現在を過去から切り離すわけには行かない。「戦争はもう過去のことだから」と戦争体験を排除するのではなく、もう一度戦争体験に耳を傾け、共感し協同してゆくことこそが必要なのではないだろうか。それこそが、他者に共感し、想像し、理解し、連帯してゆくという平和構築への第一歩になるのではないかと思う。現在の日本を見ていると、戦争体験に耳を傾け、他者に想像を働かせるという一番大切な部分が置き去りにされていると感じる。

戦後、二度と戦争はしないと誓ったはずの日本が、何故現在、再び戦争に関わってしまっているのか。その最大の原因は、私たち戦争を知らない世代が、一番大切な戦争体験に

関心を持たず、継承しようとせず、他者への想像を放棄してしまったことにあるのではないだろうか。

「戦争は絶対にしてはならない」。何度も香取さんが強調した言葉である。戦争は絶対にしてはならない。そのためにも私たちは今一度戦争体験に耳を傾けることが必要なのである。今回のボランティアでその貴重な機会を得ることが出来たのは非常に幸運だったと思っている。

私の軍隊の思い出

千葉　　忠（根戸在住）

千葉忠さんは大正10年、佐賀県小城郡東多久村に生を享けました。昭和16年その暮れには大東亜戦争に突入する年の春四月、東京帝国大学法学部へ進学されます。大学在学中は、佐賀育英会の寮で寮生活を送ります。

寮は渋谷宇田川町という立地、テニスコート完備そして何よりも二食付きの恵まれた環境でした。戦争が始まると、時局柄やはりこの戦争のことを寮生同士話し合っていたようです。そしてその中に塚原さんという方がいらっしゃいました。塚原さんは奥様とお子さんをすでにお持ちでした。もともと『禅』に関心をお持ちだった塚原さんは、このときも座禅に通っておられ、その勧めで千葉さんも一緒に行かれたこともありました。のちに千葉さんと同時に海軍に入隊された塚原さんは結局サイパンに出征、玉砕されてしまうのです。千葉さんは戦後塚原さんのお墓参りをなさったそうです。塚原さんは非常に偉丈夫であったのみならず人格識見ともに優れていたと千葉さんはいまでもその死を惜しんでいらっしゃいます。

在学中に徴兵検査を受け、第一乙種合格となり昭和18年9月に千葉さんは東大を卒業されました。というのも兵不足のあおりを受けてあと半年長く勉学できたはずの期間を削られてしまったのです。

千葉さんは海軍を選びます。スタートは横須賀武山海兵団でした。6時起床9時就寝。寝床はハンモック。訓練では連帯責任を取らされることもありましたが、食事は歓談しながらゆっくり食べられるといった時間的余裕を与えられていました。タバコを入手することもでき、千葉さんはもともとたばこを吸う習慣はありませんでしたが、上官から、戦場にあって沈着冷静を装うためにたばこを吸え、と言われそれ以降喫煙の習慣が身についてしまったとのことです。

昭和 19 年、久里浜海軍通信学校に入校。それは航海、機雷、通信、砲術、水雷などの術科へ分かれるとき、「『デンタン』はどうか」と支隊長から勧められたためです。これを千葉さんは伝単（宣伝ビラ）のことと思い、迷わずその道に進みました。チラシの作成、配布をイメージしていたからです。

術科に分かれる際は長所を生かすことを第一に自分の希望も聞いてもらえました。千葉さんは英語や、漢文の素養があったのでその能力を活かして文書を作ることができると考えたのです。

ところが実際はデンタン＝電探（電波探信儀）つまるところレーダー部門のことだったのです。入校後、校内見学時電探の機械を実際に見たときも謄写機か印刷機械と思ったそうです。レーダーは敵機襲来を観測する機械ですが、当時アメリカ、イギリスでは電探が発達しており、濃霧や、暗闇でも機能しました。一方、日本の機械はかなり原始的でした。

その後機械が改良され、終戦直前には射撃用電探も開発されたとのことです。

昭和 19 年春、通信学校を卒業。20 年 1 月には千葉さんは浜名特設見張所長になり、部下 100 人を統率するようになりました。ここでは水の苦労がありました。その人数分の炊事、洗濯、風呂用の水を確保しなければならないのに水が無いのです。しまいには窮余の策で地元の祈祷師を呼んで占ってもらってやっとその言葉通りに木の根元を掘ったところ水が出たという話もありました。千葉さんにとっては今でも不可思議な体験です。

同 20 年 7 月、横須賀鎮守府防空指揮所に異動。そこでは電探で得た情報を情報参謀に伝えるのが任務となります。8 月 15 日、終戦を告げる昭和天皇の玉音放送は、ここ横須賀鎮守府で聞くことになるのです。千葉さんは天皇陛下の声ははっきり聞こえて、意味内容も全部理解したとおっしゃっています。結局のところ敗戦ですから気落ちはしたけれども、一方で暑い最中暗幕を引かないでも寝られるなど、ほっとした気持ち、様々な憶測が飛び交い、さあ、家には帰れるのだろうかなど複雑な心境であられたようです。

しかし 8 月 24 日には退職金をもらって復員。（このお金はその後の預金封鎖でほとんどを失うことになってしまわれるのですが。）

国鉄で佐賀へ向かう車窓から見えた広島は正に焦土化という字義通りの様子であったとか。帽子、ももひき、シャツ、軍服、ステンレスの軍刀、短剣などは軍用行李に詰めてチッキで送り、千葉さんも無事郷里に着いたのでした。

戦争の勝算に関しては開戦当時から果たして勝てるのだろうかと思っていたこと、また、戦場にあっては良い戦況が流されていても海軍公報で友人の戦死の辞令を見たり、昭和 20 年 8 月の始め、横須賀軍港に敵機が着水した際でも砲台の故障で攻撃できなかったこともありこれでは勝つのはとても難しいと思われていたとお話しになりました。

千葉さんは最後にすべての戦争が良いとも悪いとも言えない。有史以来絶えたことのない戦争が完全に無いという世界は、考えられない。人間に大事なことは誇りある生き方であり、その結果としての潔い死というものもある、と締めくくられました。

文責　小泉　郁子、立野　則子

聞き取りボランティア「感想」

ボランティア　小泉　郁子

お会いした千葉さんは　その佇まいが峻厳であられる方でした。「静かに」戦時中の生活や軍隊生活を　冗談を交えて　語られました。言葉を丁寧に選びながらお話されるご様子から、私は「本当に強く、タフであることとはどんなことか」を考えるようになります。それは戦時下でも平和時でも必要なことですから。決して懐古趣味に陥ったり、感情的にならない千葉さんの語りを文章化することに腐心したつもりです。

語られた内容には　深い洞察と人生が　込められていることをお伝えしたく思います。

聞き取りボランティア「感想」

ボランティア　立野　則子

今回聞き取りをさせて頂いた千葉さんのお話は、どれも興味深いものばかりでした。戦時中の海兵団、術科学校、任地での生活など、年少の世代では普通に暮らしていても知ることのできないことです。そのお話のなかから戦争とは、台風のように過ぎ去っていくものではなく徐々に生活を侵していくものだと感じました。

実際に戦時下を生きて来られた方の体験談を聞くこと、伝えること、読むこと、それは今後の生き方に必ず、プラスの方向に作用すると信じています。貴重な経験をありがとうございました。

親も子も夢に向かって

中村　　宏（寿在住）

父は柴崎生まれの職業軍人で、海軍に勤め横須賀に住んでいた。戦争中は母と妹が我孫

子の親戚の家に疎開していた。

昭和19年2月19歳で旧制中学から陸軍へ志願。浜松の中部97部隊に入隊、3ヵ月の訓練の後、三方原飛行隊で飛行機の整備を主にしていた。

19年10月研修に行かされていた立川の整備学校でB29の東京初空襲を体験。米国との飛行機の性能の差を痛感。高度が全然違っていた。

20年6月以降の空襲では本部の命令で「最後の本土決戦為に無傷で」と、飛行機を長野県伊那の飛行場に避難させていた。浜松は壊滅、「闘ってくれる」と思っていた地域の信用を失墜させてしまった。

三方原で一番忘れられないのは少年飛行兵の事だ。20年の6月の下旬か暑くなって梅雨明けが近かった頃だから7月頃だったか、九州へとどんどん特攻隊の飛行機が集められていた。その頃特攻機として戦闘機や爆撃機は殆どない。練習機を使っていた。練習機に乗って、東北や東海から特攻隊要員として九州に飛ぶ中に、三方原に不時着した少年飛行兵がいた。整備して送り出してやったのだが、少年飛行兵あがりの17歳の少年が飛行場の片隅にあった『隼の2型』を見て「あの飛行機に1回でも乗って死にたい」と泣いた。その少年は練習機にしか乗れないまま、特攻で行ってしまうんだろう。——練習機は前に学生が乗って後ろに教官が乗る。その教官の席にドラム缶が乗せてある。長距離を飛ぶ為の燃料の補助タンクの代わりだ。九州の知覧に飛んでいくのが多かった。九州に着いたら練習機には「爆弾を落とせる装置」もないから、機体に爆弾を結わえ付けて体当たりするしかない。途中で孤島に不時着したり、時速200キロでは体当たりするまでにみんな落されてしまった。この少年飛行兵の涙は忘れられない。いや忘れたくないし伝えてもらいたい事だ。

敗戦を知った時、まずお袋に会えると思った。15日が敗戦で、24日だったか中隊長に呼ばれ「マッカーサーが厚木へ来る。関東以北の兵隊を復員させる」と言われた。浜松から兵隊を連れ、貨車に乗せて1日と15時間位かかって東京駅。そこで解散式をした。そして常磐線で我孫子に疎開しているお袋と妹の所に向かった。階級章や軍刀も吊ったままだった。

戦後は父が職業軍人だった為公職追放にあい、妹が肋膜炎から肺結核の危険があった為、薬代も稼がなければならなかった。日雇いや進駐軍の車の整備、ヤミ屋もした。

家は戦災にあわず横須賀にあったが、父の友人に21年に我孫子の土地を分けてもらって、横須賀の家を解体した材木で家を建てた。

我孫子に来てからは道路舗装の業者に人を手配する仕事等で稼いでいたが、仲間と喧嘩別れした頃、我孫子一小の田口光之校長（のち教育長）と当時の我孫中の加瀬完さん（の

ち参議院副議長）が誰に聞き付けたのか家に来て「お前も逗子の開成中学出てるんだから、教壇くらい立てるよな」と何度も誘われた。22年7月に代用教員に入り、短期講習に出てやっと教員の免許もらって、23年4月から正式に一小の教員になった。——その時月の手当ては請負をやっていた1200～1500円から「260円を給す」に大幅ダウン。

振り返ると戦争の最大の犠牲者は子供達だった。すし詰め学級で、机と机の間は空いていないから机間をまわれない。

子供は完全に家庭の貧困をしょって、今の後進国の貧困と同じ。弟や妹を背負って学校へ来る子供、泣くとあやしながら教室から外へソッと出ていく。おしめ交換等している。それを暖かくみてやらなければならない。昼休みになると消えてしまう弁当の無い子。米のない弁当を隠す子。——何とかしなければと、休日に秋葉原に行きラジオキットを買い組み立てる。ラジオを農家に持っていって、米や芋等に換えてもらい、半分は自宅用に、半分は学校に持っていって用務員に預けた。（当時は何でも物々交換の時代だった。飛行機の整備、車の整備と技術畑で培ってきた力が活かされた。）昼休み弁当の無い子に声をかける。「用務員さんの所に行ってごらん」と。用務員さんは預けておいた芋等をふかして用意してくれている算段だった。

駅の操作場から出る炭ガラから家の為にコークスをとる子を手伝った事もある。だから初めて教えた生徒70人の名は今でも言える。

教科書にしたってノートにしたってろくな物がない。ちょっぴり豊かな家にいっては頭を下げて短い鉛筆でも子供の為にもらってくる。紙は特になく、テストをやるにしたって、藁半紙なんてのはなかなか手に入らなかった。町の大きなお店やさんにいって、戦争中の大福帳をねだる。売り上げ等を書く大福帳のいらないのをもらってきた。大福帳を持ってきてくれる方もいた。大福帳をほぐして、折目をヒノシ（今のアイロン）で伸ばして、裏側の白い面をテストや練習用紙にした。

貧しさとハングリーの時代の子供達というのは物凄く夢があった。学ぶ事に貪欲であった。私が最初に受け持った子供はみんな「先生、夜勉強教えろ」という。進駐軍から禁じられていたが、夜6時半から8時半まで補習をした。子供の意欲に答えるには自分も学ばなくてはと、秋葉原に行った帰り神田で昔の中学入試の問題集を買い求めたりした。

お母さん方の中にも女子挺身隊だといってろくな学校生活をしていないから、日課表をみて、算数や理科の授業の時間に来た。教室の後ろに3、4人子供と一緒に学ぶ母親がいた。親も子も、みんなが夢に向かっている時代だった。

文責　横尾　史子、秋元　澄子

生まれて初めてボランティア活動に参加して

ボランティア　横尾　史子

私が市の広報を見て興味を持ち、今回の聞き取りボランティアに応募したのは今年の6月のことだった。仕事を持ちながら趣味の活動もしているので、必ずしも十分な時間は充てられないが、もしかしたら自分にもできるかもしれないと思い、まずは応募して、説明会で話を聞いてみようと思っていた。

ところが私の応募に対して初めての応答となる担当部署からの書面が来たのは10月も半ばになってからだった。8月末の応募締め切りからかなり月日が経っていたので、その頃にはもう自分には声がかからないものと思っていたから、少々意外だった。加えて、その書面からは、応募したからには当然参加(もちろん断れない話ではなかったと思うが)といった印象も受けたので、私に限らず、4か月も前に応募した人間にとっては当時と事情が違っていることも十分に考えられるのだから、少々乱暴ではないかと思った。

それでも何とか、結果的にはこのボランティアを引き受けることになった。聞き取りの相手は、前教育長の中村宏さん。私自身は我孫子市内の学校には小学校の6年間しか通っていないが、両親が教職にあった関係で地域の学校関係の逸話には関心があったから、比較的自分の興味にも一致していたと思う。現場ではボランティアの相方である秋元さんが聞き役、私が書き取り役になり、その後、録音を元に私がテープ起こしをしたものを秋元さんに送って、それを元に秋元さんが原稿を作成した。できあがった原稿は中村さんの希望を最優先にした上で、全体の構成は秋元さんに全面委任した形になる。実際にお話を伺ってみると、紹介したいエピソードが沢山あって、2000字程度にまとめるためには多くの内容を割愛しなければならなくなった。

そこで、この文章の後半は中村さんから伺った話で、字数制限のために本文に掲載することのできなかった話とその感想を述べたい。

まずは戦後の混乱期に、生活を支えるためにやっていたヤミの仕事の話。

横須賀時代には戦争中飛行機整備をしていた経験から、進駐軍の車の整備という正業に就くことができた。その仕事で使うトラックの荷台に細工をして二重底を作り、部品を取りに隊外に出た先で、アメリカ兵から仕入れたタバコ、チョコ、バター、チーズをそこに隠し運び出し、闇市に卸していい稼ぎをしたという話。特に、日本海軍が鉄の焼き入れに使ったゴマ油の入った貯蔵タンクを見つけ、それを勝手に汲みだし、闇市に天ぷら油として飛ぶように売れた話。

我孫子に暮らすようになってからも、日雇いの人夫を集めて舗装工事の下請けをはじめ、

なんとか一本立方の事業所を目指して汗したこと。この時の仕事で働いてくれた人が、小学校の先生になってから受け持ちの子供の親の中にいて、ばつが悪かったこと。

特にスリルのあったことの１つとして、進駐軍の駐車場の舗装工事を請け負った時のこと。仕事をするふりをしながらそこに置いてあるガソリン缶にコールタールを掛けて真っ黒にし、守衛のMPに袖の下を使い、コールタールの空き缶と一緒に運び出し、運送会社に高値で売り込んだ。時々、それを運んでいる最中に、MPのジープがサイレンを鳴らして走ってくると、追い越されるまで冷や汗を流した話。

これらは、戦後の混乱期だからこそまかり通った話で、その内容たるや、無法者を題材とした娯楽劇を彷彿とさせるような話である。当時はだれもが、生きるためにあらゆる智恵を絞っていたということだろう。

軍隊生活では、人間は要領が良くなければ生きていけないということを身を以て悟ったという話が印象的だった。敵機を迎え撃つような場面で引き金を引くタイミングのように、軍隊内での訓練の名のいじめの中で、何事も要領よく対処しなければ生き延びられないことを学んだ話だ。賢く行動できる者だけが生き残れるというのでは一種の弱肉強食とも言えようが、本来、生きるというのはそういうことではなかったのか、とも思う。

その他、戦後の小学校で、子供達の学ぶ意欲が旺盛で、指導力の弱い先生方が子供達に拒否され、バリケードで教室に入ることもさせなかった、現代でいう学級崩壊のような状態もあったというエピソードも興味深かった。塾もなく学校の勉強が全ての時代とはいえ、小学校の４年生や５年生が、休み時間に他のクラスと情報交換をして学習の進度を競い合っていたなどという話は、今では想像もつかない話だ。子供だけではなく、親達も夜の補習授業を積極的に支えていたというのだから、世の中全体がそういう傾向にあったということかもしれないが、およそ受験戦争などとは無縁の、のんびりした小学校を想像していた私にとっては、全く予想外の話だった。十分な食料にさえ事欠く時代に勉学に集中できたのは、一部の裕福な家庭の師弟だけだったのではないかと勝手に想像していたが、大きな間違いだった。

まだまだ紹介したい話はつきないが、この程度にしておく。今回は微力ながらボランティア活動に参加することができ、私自身にとっても貴重な経験ができたことは間違いない。

『聞き書きを通して感じた事』

ボランティア　秋元　澄子

特攻隊の飛行機が練習機を使っていたなんて……。しかも練習機にしか乗れないまま特攻に行った少年がいたなんて……。空襲があるのに飛行機は追撃する事無く、「本土決戦の為に」別の飛行場に避難されてしまうなんて……。

聞き書きした中村さんの話には、私の知らない戦争の話がたくさんあった。中でも、住民は助けてくれると思ったのに、飛行機が別の所に避難されてしまった話は印象的だった。住民は信頼を寄せていたのに、撃墜しようともせず、浜松の町は壊滅状態になったと聞いて、住民のはがゆい気持ちがよくわかった。

中村さんの話は飛行機の知識などない私にもわかるように解説してくれ、大変分かりやすかった。

ただ紙面に限りがあって、話を忠実に再現できなかったのが残念だ。聞き取りは2時間余りだったが、中村さんは興味深いお話をいくつもしてくださった。

中村さんは戦後いろいろな職業を経験される。日雇い、修理工、ヤミや、道路舗装の人の手配、教員――公職追放となった父の代りに稼ぎ手となる為、妹の薬代を稼ぐ為だったが、たくましく、どの経験も次につなげて、技術を深め、人を見る目を養い、必死に生きたんだというのが伝わってきた。「働く」「生きる」パワーが伝わってきた。

例えば、陸軍で飛行機の整備をしていた事から、日雇いの手配の人に進駐軍の車の整備の仕事をもらう。そこで進駐軍の品物を、二重底にしたトラックで持ち出し、ヤミやをやる。後に教師になって、弁当の無い子の昼飯と、自分の食べ物を得る為に、技術畑で培った器用さでラジオをつくり、農家の人と物々交換をする。人の手配をする仕事で、欲もあればわがままもあるいろんな人と接した事が、教師になって子どもたちと接する時の広い視野に繋がる。――経験が次の生き方に繋がるたくましさには、頼もしさを感じた。中村さんがおっしゃるように、それは「親も子も夢に向かっている時代」のたくましさであったんだろうなという気がした。みんながたくましかったんだろうなという事は、例えば、家の為、駅の炭がらからコークスを探す子どもにもうかがえる。

戦争も後半は武器が無かったから、兵隊を集めても訓練すらできなかった。やる事が無いから、松の根掘りをして燃料を作っていたという話を聞き、本当に日本は窮していたんだなと思った。飛行機を温存しなければならなかった軍の戦略をみても、負けるべくして負けたのだという事もよくわかった。戦後の話も我孫子辺は農家の家も多いだろうから、あまり食べ物の苦労はしなかったのではないかと勝手に思い込んでいた。しかし弁当を満

足に持って来れない子もいたことを知り、本当に物の無い時代だったのだなと思った。

だが物は無くても意欲があったと聞いてホッとした。学んでもっとよくなりたいという人のパワーが感じられた。物がない方が物を得ようとするパワーや知恵がでてくるのだろう。（物に恵まれ現代に生きるわたしには、かんがえるべきものがある）

戦争の話も戦後の話も知らない事が多いと反省し、もっと知らなければと思った。

ボランティアに参加したのは「聞き書き」に興味があったからだった。昔から物を書くのが好きだった。はじめての「聞き書き」のテーマとしては、戦争は重い気がしていた。

中村さんは話す内容のメモも用意されていて、先生をした人らしいわかりやすい言葉で話してくださり、力のない私達は救われた。私個人としては、我孫子の教員生活についても是非書き残していただきたいと思った。ペアを組んだ横尾さんは、テープ起こしの細かな作業をはじめ、適格な提案をしてくれて頼もしいパートナーであった。伝えるべき事のいかほどが伝えられたのかは自信が無い。中村さん、横尾さんをはじめ周りの人のおかげで貴重な経験をさせていただいた。

平和な世の中である事を誇りに思って生きたいと思った。

戦後60年におもうこと

星野　芳江（湖北台在住）

私は、昭和4年7月28日に東京吾妻橋で産まれ、家庭の都合により栃木の烏山小学校、栃木小学校、東京久我原小学校、神奈川の横浜老松小学校、鶴見高等女学校など転々とし、東京大空襲のあった昭和20年当時、16歳の私は東京府立小松川高等女学校に在学しておりました。既に病で父親に先立たれ、また5人兄弟の妹弟はそれぞれ別に疎開していたため、東京で産婦人科を営む叔父夫婦のもとで母や姉と共に計8人で生活していました。昭和20年3月10日、空襲警報が鳴り、医者である叔父を残し、前日に産まれたばかりの赤ん坊と患者さんを連れて、防空頭巾を被り、隅田公園の公衆トイレの片隅に非難しました。同じ隅田公園でも、ラジオ塔前広場に避難した人々は重なるように火の海で焼死し、隅田川に飛び込んだ人々は凍死したそうです。私が避難した公衆トイレ付近は奇跡的に被害が少なく、運良く助かりました。息をひそめて身を硬くし、朝方午前6時頃伯父の家まで戻りました。その時にあらためて周囲の悲惨さに呆然としました。大勢の人々の死を見聞し、また早く父を亡くしていたことから、子供心に、「いつまでも大切な人達と一緒にはいられないのだ」という思いを実感し、「死」ということを考えさせられる日々が多かった気がし

ます。

「昭和21年頃に短歌を習い始め、その後昭和45年以降に当時の心境を詠んだもの」

ま夜なりき　空の赫さに驚きぬ　Ｂ２９本土　初空襲の火の粉

防空壕にある限りの米投げ入れぬ　三月九日避難五分前

防空頭巾に掻巻被り　産婦の手ひきて逃れし　隅田公園

隅田公園　公衆トイレの片隅に　震へて寄り添ひし　街医の家族

浴槽に　青き薬瓶は無傷なり　一夜恢燼となりし　医院跡あり

医療器の　かばん一個と食糧の　リック一個の手荷物さげて

隅田川　吹きてくる風熱くして　浅草寺辺り　火の海となり

逃げきれず　黒焦げの下肢　はみ出せる焼土と化し　防空壕に

焼け残りし　土混りの米暫くは　罹災一家の　食糧となる

三月十日　めぐりくる度　思い出づ　女医を夢みし　友の焼死を

この空襲の後、叔父が持っていた箱根の強羅の別荘へ疎開、母が魚は真鶴へ、米は小田原や伊勢原へ買出しに行きました。また別荘には脱脂綿やガーゼ、父のモーニングや母の花嫁衣装など疎開させてあったので、物々交換することで生活することができました。神奈川の小田原高等女学校卒業後の進路をどうするか迷っていた時、叔父から「手に職を持った方がいいだろう」と医者としての勉強を進められ、また被災した当時の親友が女医になることを強く夢見ており、その親友が戦争によって夢を叶えられなかったことや共に勉強してきたことを思いだし、医者になることを決意しました。その後、帝国女子医学専門学校、改め東邦女子医専（今の大森東邦大学）で学び、22歳で医師免許を取得しました。

昭和 30 年から東京吾妻橋に戻り、伯父の産婦人科を手伝いながら、三井紀念病院産婦人科に通い、33 年に同じく医者を目指していた主人と結婚、40 年に我孫子中央診療所、45 年 7 月医療法人我孫子中央病院を開業、61 年 4 月より約 3 年間、主人が学生時代より夢であった海外医療奉仕（フィリピンのハンセン氏病撲滅）に同行しました。平成元年より、今の星野医院を開業致しました。

終戦を聞かされた直後、アメリカ軍が上陸し、当時「女子供は殺される」というような噂がたったこともあって、気が休まることはありませんでした。今やっとこうして戦争の体験を省みることができるようになりましたが、戦争の悲惨さは今でも忘れることができません。現在、幼児虐待や無抵抗な低年齢児を殺害する事件が多いように思われますが、精神的に複雑な問題が絡み合って、現代の方が子供に関わる難しい問題が多いのでしょう。しかし、命の大切さを忘れないで、毎日を生きてほしいものです。

「小田原高等学校女学校時代学徒動員時に詠んだもの」

一貫目の楮の皮をむく日課　動員されし　製紙工場

空襲解除　積まれし紙の屋根裏に　機銃掃射の弾痕をみき

ふやけたる　楮の皮むき授業なり　転校生我れ　いつもしんがり

手賀沼に　かる鴨親子泳ぎ居る　戦なき世を　経る六十年

文責　星野　宏美、佐々木　洋子

聞取りボランティアを体験して

ボランティア　星野　宏美

私は日頃、時代の流れと共に移り変わる人々の文化や精神、衣食住など、いわゆる「民俗学」的な部分に興味が惹かれ、勉強したいと願っておりました。終戦 60 周年記念行事の一環として文集を作るという企画を広報で見たとき、聞取りボランティアに参加することによって、戦争に関わった人々の心情に触れ、その思いや体験を多くの人に伝えたいと思いました。市内在住の被災者の方々から話をうかがい、文章にまとめるという作業は、とてもやりがいのあるもので、ぜひ参加したいと思いました。

私自身の戦争との関わりは、幼い頃に祖父や叔父から戦争の体験を聞かされたことが主です。叔父の足には鉄砲の弾をうけた穴のような傷があり、お酒を飲んでほろ酔い気分になると、決まってその傷を眺めながら戦争にまつわる様々な体験を語ってくれました。また小学生の時、親に連れられて見に行った「ザ・デイ・アフター」という洋画で、黒い雨が降っていた映像に衝撃が走り、更に中学生頃「黒い雨」という邦画をみて戦争の怖さを改めて考えさせられました。私たちが現在、戦争という現実を理解するための手段として特集のテレビドラマや映画があります。戦争を扱った映画は、どうしてもその悲惨さから、悲しみや苦しみが溢れ、目を伏せたくなりがちですが、映像は作られたものであっても、戦争が行われたという出来事は確かに現実なのだと思うと、過去の出来事から目を背けてはいけないと、必死の思いで見てしまいます。現実を知れば知るほど、2度とこのような過ちは起こしてはいけないと思います。そして、この物が豊かな現代に生まれた自分がどれだけ幸福なのかを実感します。私達は、戦時中と比べ、余りにも豊かな時代に育ったことから、命や物の尊さに感謝することを忘れてしまいます。食糧難で苦しむ子供たちが海外に未だ存在するにかかわらず、日本は食べ物を粗末に扱う傾向があります。食べ残した宴会料理の殆どはそのまま棄てられると聞きました。また長寿大国の日本といわれながら、一方で自殺者が一番多い国でもある矛盾が生じています。私にとって、この企画に携わり、自分がこれからどう生きるべきかを問いただす良い機会となりました。この文集を手にした人々も、同じようにきっと感じてくれることでしょう。この企画に少しでも参加できたことを嬉しく思います。また、このような機会があったら積極的に参加してみたいと思っています。

聞取りボランティアを体験して

ボランティア　佐々木　洋子

戦争を体験された星野先生のお話を聞き、改めて戦争は恐いと思いました。東京大空襲を実際に体験された時のお話を聞き、星野先生家族は、運がよく助かりましたが、先生たちのいらした数百メートル先では、人から人へ火が燃えていたそうです。背筋が寒くなるような感じでした。

大変な戦後の中で、先生は医師になられたのは、お母様が「手に職をつけておいたほうが良い」というお考えがあったからのようですが、その時代に、そういう考えをされているお母様はとても尊敬できます。又それを実行された先生はもっと尊敬できると思います。

戦争があったのは遠い昔のように思えますが、私が生まれる10数年前の事なんですね。

私たちは平和や物に不自由しない生活が当たり前のように生活していますが、便利がゆえに様々な事件や、事故が起きていることが怖いとも思います。

星野先生も戦争を体験された方々は、その時の事を鮮明に覚えています。

忘れようにも忘れられない様です。二度と、悲惨な戦争は、起こしてはいけないです。

東京大空襲を生きて

山脇　しげ（寿在住）

1．結　婚

わたしは、昭和19年1月18日、叔父の紹介でお見合い結婚をしました。夫になった人は支那事変に出征し、顔と片耳を負傷していました。婚家【東京府本所区緑町1丁目14番地（両国から5分の場所）現在の墨田区清澄通り】は、関東大震災の火災に遭い、義父は、本所の被服廠に逃げてそこで死亡。子ども2人は、深川の親戚の人に、義母は生後1ヶ月の子を背負っていて、沢山の死体の山の中から助けられたという家でした。

2．応　召

昭和19年1月に夫が2度めの応召、両国駅から出征しました。結婚して4，5日後のことだったので、実家に帰ろうかとも思いました。物資のない頃でしたが、義母とおはぎを作って当初の入隊地、甲府へ面会に行きました。その後も手紙を出したのですが、わたしの手許には広東からの手紙が1回届いたきりで、その手紙から夫が広東にいることがわかりました。夫の母との2人暮らしの中で、何も考えられず、無我夢中の毎日でした。

3．東　京　大　空　襲

空襲の日（3月9日の夜半）、サイレン・「空襲警報発令」という合図で、みんな深川へ逃げ、川に飛び込んだ人も沢山いましたが、助かった人は少なかったです。夫の家族は浜離宮の方へ避難して助かりました。近くの防空壕は小さかったし、関東大震災の経験から、上野へ逃げようと話していたので両国の駅に行ったのですが、すごい人と火で上野へは行けませんでした。行けなくて助かったのです。また、国技館がメラメラと燃えて、屋根が飛んでくるのではないかと思いました。ここまで来て力尽き、気がついたら朝でした。助かったみんなの顔は煤だらけでした。この時の火災と煙でわたしは、喉を痛め1ヶ月位ガラガラ声しか出ませんでした。眼を痛めた人には、医者ではない人が

治療にあたっていました。火が、「地べたを這う」ということをこの時初めて見て、火の恐ろしさを実感しました。我家は全焼してしまいました。そして、近所の人は、空襲の翌日には、みんなバラバラになってどこに行ったのかわからなくなっていました。

4．被災前後（当時）の日常生活

婚家は、建築関係の金物屋でしたが、売る物は（当時は、米・晒・たばこ等日常品すべて配給制）鍋・釜など統制された物だけで、商売はほとんどできませんでした。強制疎開や建物疎開もあり、タンスや大きな家財道具を売ったり道路に出したりしている人もいました。毎日のようにサイレンが鳴るのですぐ避難できるよう、寝間着に着替えず普段着で寝ました。手作りの防空頭巾をかぶり、名札を縫いつけた肩かけかばんに少しの乾パンなどを入れて身につけていました。昭和19年11月頃、我孫子から見る東京の空襲は花火の様でした。そのうち、昭和20年1月頃になると「戦争に負ける、もうだめ」という噂も聞きました。空襲で家は全焼したので、浅草から尾久（夫の弟の所）に避難し、お世話になりました。でも、5月の空襲で尾久の家も焼け、義母と2人でわたしの実家（我孫子）に身を寄せました。その後、義母は自分の姉妹のいた深川、千葉の本八幡・浦安へと移り住みました。その間、わたしも実家に行ったり、義母やその姉妹とも同居したりの生活でした。その頃は、生活物資がなく闇市等で買い出しをして大変でした。大空襲の後、疎開・避難してきていた人たちも次第に空家を見つけて元の所へ帰っていきました。

5．夫の復員とその後の生活

昭和20年秋、わたしより1歳年下のお友達（当時2人の女児の母親）に、「稲毛に行くと夫の生死がわかる。」と誘われてそこへ行き、夫の名前を見つけ、夫の生存を確認できました。でも、その人のご主人は、硫黄島で戦死したことがわかり、帰り道はとても辛かったのを覚えています。

その後、同じ町内の人のつてで調べていただき、浦賀沖の復員船（復員船は2月到着。この船内にコレラが発生し、3ヶ月位浦賀沖に停泊。沢山の人が船内で死んだという。）に乗船していることがわかり、おむすびを持って1人で面会に行きました。香典帳の様な名簿で名前を確認し、そこに来ていた初対面の人の後について、道もわからない所を、山や、田圃の中を歩いてようやく学校か兵舎跡の様な所へ着きました。そこで名前を名乗り、ようやく消毒臭い夫に会えました。帰り道は、真っ暗な中、我孫子駅から家まで線路の枕木の上を歩いたりして帰ってきました。無我夢中でした。持っていったおむすびは、その場にいた青い顔の復員兵みんなで分け合って食べていました。一後に戦友が集まるとこのおむすびのことがよく話題になったようです。そして、昭和21年5月、夫

は復員できました。

夫の復員後、夫の勤務先の人の御好意で、下北沢・愛宕（野田）での８畳一間の間借り生活（当時は薪持参・銭湯でのシラミ騒ぎ・昭和22年２月長男を出産）、その後昭和22年我孫子市へ引っ越し、男子２人を出産してやっと落ち着きました。その間、昭和21年、夫の弟の戦死（ビルマで昭和20年６月戦病死）の公報が千葉へ伝えられました。30歳から女手一つで男の子２人を育ててきた義母を、この時は本当に可哀想だと思いました。

今から思うと、当時は無我夢中でよく働いたなぁと思います。

文責　淺井　亮慈、竹下　八千代

聞き取りボランティアとして
山脇 しげさん のお話を聞いて、思ったこと・感じたこと

ボランティア　淺井　亮慈

山脇さん ご夫妻は、ともに大正年代のお生まれで、こぞって戦争の渦中に巻き込まれた世代です。

昭和19年１月にお見合い結婚されて、同月にご主人が出征されました。婚家に嫁いで、義母とともに金物商を営みながら、銃後を支えられたことは、日本全体がそうであったとはいえ、商売と空襲からの避難に、緊張の毎日であったことでしょう。それでも、東京に比較的近い我孫子に実家がありましたことは、大きな心の支えになられたことでしょう。そして、東京大空襲のときも、戦後の生活がままならない時も、我孫子にお住いになってピンチを乗り切られています。

戦後、我孫子に住まわれて、愛宕（野田市）・高野山・寿で３人のご子息を出産され～育てられたことは、ご家族にとって我孫子が文字通り故郷ということであり、生活の基盤なのでしょう。

３年前にご主人を見送られて、今はご子息のご一家と同じ敷地内の離れにてゆっくりと生活しておられて、とても穏やかな雰囲気をもっておられました。

ご主人が新聞社に永く勤められたとのことで、当時の関連の資料は沢山お持ちだったと想像されますが、もう処分されたとのことで、拝見することはできませんでした。

東京大空襲の頃を振り返って、感慨やその思いをお尋ねしましたところ、「あのころは、いろいろあり過ぎました、あの頃は忙しかった、毎日が無我夢中でした」とのことでした。

ご主人は、55歳定年後さらに勤務延長され、その後70歳まで子会社に勤務されて、退

職された後はゴルフをたしなんでおられたようです。そして、亡くなられる前にご家族のために、身辺の整理などをされたようでした。

山脇しげさんは、婚家の縁者が被災して亡くなられた関東大震災の記念日の９月１日には、毎年被服廠跡の慰霊碑にお参りされていたそうです。

これからも、山脇しげさんにはゆったりとした時間が流れていくことでしょう。いつまでもお元気でいて欲しいと願わずにはいられません。

聞き取りボランティア「感想」

ボランティア　竹下　八千代

久しぶりに晴れ上がった秋晴れの日の午後、お嫁さんにも同席していただきながらお話を伺うことができました。急な日程の設定にもかかわらず、快くお引き受け下さり、思い出すのも辛いことでしょうに、穏やかにお話してくださいました。実体験のそれは、テレビや物語よりもはるかにドラマティックな内容でした。そして、理不尽な出来事にも負けないでたくましく生きてこられた力強さを感じました。

お話の後で、ボランティアの持っていった、【ドキュメント「東京大空襲」（写真集）】を見ながら

「嫌だね。かわいそう。」「なんて、ひどい。」「鶯谷では、死人をトラックで運んでいた。戦争だから仕方ないけどね。今では考えられない。」「馬鹿な戦争してた。今から考えると人の命を奪うもの。アメリカはなんて思ってるのかねー。」とつぶやいておられた言葉が、忘れられません。東京大空襲に対する本音を吐露されたのでしょう。そして、「このような話は、余りしたことがない。」とのことでしたが、お嫁さんは、「お義父さんから子ども達が結構聞いてました。」というお話でした。このお宅では、戦争は語り継がれていくだろうなと思いました。

今も世界のあちこちで、戦争があります。山脇さんから伺ったような悲惨な出来事が日常茶飯事にあることを思うと「戦争」は二度と繰り返してはならないもの、体験した悲惨さを風化させてはならない、次世代に伝えていかねばならないものと痛感しました。